

を思ひ出す。又君の思想が嘗ての日を修正し現在を正視し、或種の反省と、新しい針路と、薬の様な懷疑と、解決への望郷を想ふが、僕の現在は君とは反対のところにある。矛盾から矛盾への遁走とも云へようか。現在に對する執着と現在を去つて未來に突入しようとする思想が同じ位の力で引きあつてゐる。過去の事はあまり考へる間がない。現在で心が一杯になつてゐるせいかもしれない。

今日電車の中で服部見英に逢つた。元気さうだつたがやつぱり疲れるといけな相だ。

人は現在に對して何かの意味で強い不満を持たなければ決して過去も未來も考へない。考へなくてもよい程まことに充実した現在にゐるならば、それは早、遊戯三昧とも觀自在とも云へようか、さうでないのに現在に對して強い不満を持たないのは、必ず停滞し墮落してゐる証拠と云へようか。僕は今の停滞からぬけ出て、新しい波瀾を求めよう。愛する者の声は甘く、そのまなざしはやさしく輝かうとも、漂泊者は、ここを久しい住家とはしないだらう。

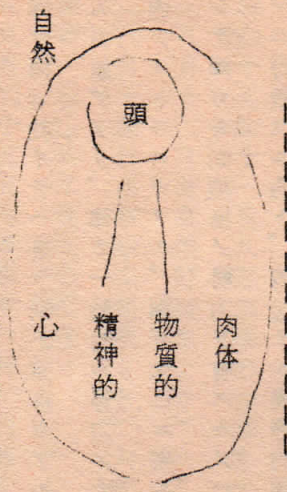
虹はどこまで行つても、山のこちらにない事を知り乍ら虹を追ふ者とそしり給へ。我が手の中の虹の美しさに盲目なる者よと笑ひ給へ。僕はなほ愛する人々を離れて波を蹴らう。

カロッサのルーマニヤ日記を読むと、明澄な精神を少しも失はずに生きる事は如何ばかり難いかと思ふ。そしてカロッサはそのまれな人の一人だとの感が深いが、己にかへると、まあ何とにこつた世界であらうか。

が又一方、もはや小さな思慮をすてて、求める者の手に、己をゆだねた生のぬくとさを思はないでもない。要するに僕は今、非思非想無慮放散であるとしてより云ひやうがない。

へ続いて私の感想

さすが原田である。どんな境涯に身を置いて、教々として己を見つめる事を止めない。たえず若々しい情熱を失はない。己をさいなみながら、然も一歩一歩堅実な生の歩み続ける彼、彼の言葉は余りにも自分の思想を代弁してくれてゐるが、然も彼は自分より常に一歩先を歩いてゐる。ああ自重して長らへ給へ。



心も自然の子
肉体も自然の子
智力も又自然
の一部分である

へ先に出したディーツゲンの主張であらうか

▼十一月六日付松浦一嶺端書(十五日受)

玉浦村は阿武隈川口にあるらしく、晩秋の時雨云々を聞き、いまさら「秋」を想つてゐる。此方では秋と云ふ頃がよい。

へはがきを見ての私のことばである。松浦君はこの三ヶ月後の二十年二月に台湾で戦歿する。このはがきを写し取っておかなかつたのは残念である。

※仏教が一般ニ振ハナイノハ仏教教理ノ高等スギル為デアル。嘗テ仏教が婆羅門ヲ凌イダノハ宇宙ノ創成ヲ論ゼ

ズ、理論ノタメノ理論ヲ廢ヘ廢シ、人間ノ實際的方面ノ開拓ニ努メタガ故デアツタラウ。ソレガ今デハ薄ガフサガリ、銹ガツキ、埃ガタマツテシマツタ。

頭教ヘけんぎょう・天台ノガ唯識ヘゆいしき・法相ノニ優レタノハ整々タル条理ガ煩鎖ヘ預ノナ分解ヲ一蹴シタガ故デアリ、密教ヘ真言ノ頭教ヲ圧倒シタノハ理論ヨリモ實際ノ優勢サヲ示シ、頭密ガ念仏ヘ浄土教ノニ追ヒ越サレタノハ學問ヨリモ信仰ノ強力サヲ物語ルモノデアル。而シテ天理教ガ一時昇天ノ勢ヲ以テ弘布シタノハ世人ハヘガソノ通俗的(ワカリヨイ・身ニ切ナ)ナ救済(病氣)ニ魅セラレタガ故デアリ、而モ近時停滯ノ様ヲ示シツツアルモ亦ソノ余リニ通俗的ナ教理故デアル。

律ヤ禪ニ就イテハ自ラ別ナ面目ガアル。律ガ禪ニ劣ルノハ世人ガ切々ヘきまじめノヨリハ悠々ヘおつとりヲ好ムガ故デアリ、律ガ一般的ニ勢力ノナイノハ世間ニ真ノ道德家ガ少イノト同ジ現象デアル。律ハ英才教育トモ似通ツタトコロガアル。禪ガ念仏ニ劣ルノハ、理解シ難イ点ト身ヲ苦シメル点トニアル。人ハ常ニ安易ニツク。而シテ禪ガ今尚相当ノ勢力ヲ有スルノハ、空理ヲ談ジ即身成仏ノ頓道ヘ早道ノヲ説クコトガ東洋人的尚好ヘこのみノニ合致スル為ト、静坐ナル實際的形式ト、(大悟徹底ノ實際的要求ト)ニ依ルガ故デアル。(一一、一六)

※強情さへ張り通せば勝つた気でゐるうちに、当人の人物としての相場は遙かに下落して仕舞ふ。不思議な事に、頑固の本人は死ぬ迄自分は面目を施した積りか何かで、其時以後人が輕蔑して相手にして呉れないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのださうだ(我輩は猫である)

※人間の定義を云ふと外に何も無い。只入らざる事を捏造して自ら苦しんでゐる者だと云へば夫で充分だ。(我輩は猫である)

※内科病室の読書室へ時々行つて読んでゐた本の中に「我輩は猫である」がある。首尾を欠いてはゐるが、殆んどへ全文を讀み了へたと云へる程度。へに残つていた。部分的には以前目にした事があるが、通読は今度が初めて。徹底的な唯理論へ理論いつてんばりへから、従つて純客觀的に人間の社会を剔へえぐり、人間の生活を解剖しながら、何等冷たさ固さを与へない点へはへさすがと思はされる。(一一、一六)

※イブセン作「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」

青年エルハルトが

“末の成行だの、未来だのと云ふ事は、僕は考へてゐません。過去を見返つたり未来を見渡したりする気は、僕にはないのです。僕は只生涯に一度生きて見たいばかりです。”

と云つて父母を棄てて、氷雪の道を糧に乗つて、幸福を求めて勇ましく出て行く——正宗白鳥「空想と現実」
一五〇頁

右のボルクマンの言葉は肯ける。我々もさう云はう。然しさう云つたからといつて、父母を棄てて氷雪の道を行く様な一徹な現在の生き方を自分は選ばない。吾々も只生涯に一度生きる情熱を有つ。然しその生きるとは決して華々しい様相を求める事ではない。生き甲斐のある生、即ちそれは宇宙の真相に根を置く生である。

※謂へいわれを聞いて有難がる

・藤村の詩になつたが故に小諸の景は美し。

・能の説明を聴き、我が国文学史中に於けるその位置を知つて能が有難くなる。

・偽物の壺も誰かから真物と云はれればさう見える。

右は何を意味するか。主観の客観よりの優位を示す。

(一九、一一、一七)

▼十一月八日付貴美子はがき(十一月二十日受)

級長へになつたノ由 へ貴美子は直子の叔母さん。十二才頃か。▽

▼十一月九日付幸代はがき(十一月二十日受)

六月以来学校ガ工場化サレ、七時ヨリ五時半迄作業。

(此方ヨリ送レト云ツテヤツタ軍隊内務令等ハ消サレテキタ由)

▼十一月十一日付高田平二郎氏はがき(二十日受)

へ高田氏は十月十二日付大塚先生端書によれば奉天にいた筈。▽

※正宗白鳥氏の名は中学生時分から耳にしてゐたが、実際にその著作に触れたのは、今度入院中に「空想と現実」なる随筆集を読んだのが初めて。そしてその中に、「非科学的迷信」として宗教的なるものをあつさりと片づけてゐるが、この一語によつても氏の人生観、社会観は大體察しがつき、人物の深さ厚さ等は到底期し得られない。

思想は勿論浅薄としか思へな。 (一一、一一)

へ正宗氏はクリスチャンから無神論者に転向。戦後の日本ペンクラブ会長。一片の語で思想浅薄とは大胆な。▽
※どんな本でもよい。一冊の本を自分に与へてくれるならば、その中の一字或は一句による刺戟から、平素自分が信じ、考へ、思つてゐる混屯たるものが、俄然一つの表現を獲得する事が出来るだらう。それをその時その時書き留める事が出来るならば：：（一一、二一）

※前送が決定しても、端書が全然ないためへ入手できないに、書信無用と知らず事が出来ない。糸、はみがき粉、ちり紙、いんく等々皆不自由。へ十一月二十一日の時点で二十三日の前送が知らされたらしい▽

▼石井直一上等兵殿はがき（十一月二十一日受）

満州第一五七軍事郵便所気付 満州第五三五部隊牛田隊（可） へ石井氏については記憶がない。▽

▼十一月十一日付四郎はがき（二十一日受）

修へ弟へは北支方面に行つた由。 へ修は鉄道兵だつた。▽

▼十一月十二日付森田曠平絵はがき（二十一日受）

手帖へにへはりつけ保存

へ絵はがきを二つ折にし、折目で切段、見開きの所にはりつけている。絵は後方に薄墨で御笠山を、中景に墨と青で松四本を、前方に赤や黄でもみじやすすきを描写。左中程に「曠平」の朱印をおし、「御かさ山の秋深みまを志候曠平生」としるしている。▽

夜来庵かぜだより 一若い日の森田曠平

(八)

原田憲雄編

へ一九三六(昭和十一)年 九月十九日 夜付、二十一日午前、聖護院局消印、はがき。墨書。
野の末に乱るるけぶりひようひようと野分はしるく吹きわたるなり

二十一日 伏見に帰る予定 その節又知らず 曠平

へこのはがきは、白と淡緑の水彩絵具で菊の花を描き、その上部に歌、下部に通信文を記す

九月二十一日 付、二十二日午前、伏見局消印、はがき。

今晚伏見へ帰つた。へ水壺のへ石井へ直三郎へ氏へに関するへキフ金 弱つた。大阪に「平家物語」(古雅絵入表紙箱入十二冊)があるが買へぬ。高いから。勿論随分古いもの。

へ沢田へ宗山のへ陶器のへ個展。東京、大阪、京都、朝鮮、と四回ある。期日ははつきりわからぬが、近いうちだ。だからとてもいそがしい。来月には入つたら(十日頃)遊びに来てくれたまへ。

十月二日 午前、伏見局消印、はがき。

忙しくてとても長く書けぬ。君の詩の批評は出来ない。

僕の方は歌も出来ぬ。あることで少し悩んでゐる。悩むといふより苦しんでゐることがある。それが何か、はつきり分らぬ。とにかく意馬心猿の状態にあり。四日の日曜暇なし 十一日はどうなるか分らぬ。君の便まつ。人に告げる悲しみならず秋草に息しろじろとつきにけるかも へ島木へ赤彦

十月五日 午前、伏見局消印、はがき。

十日待つてゐる。

へ君の淋しさに憤りつつ；；の作へ短歌へ 傑作だ。僕の今月への『水壺』にのつた作品へはなつてゐない。自分でいいと思つたし大塚先生もいいと言はれたのがへ選ばれてゐない。どうせあんを選はいいかげんものだらう。ちよつといやけがさしてゐる。この頃は歌には殆ど没交渉でくらししてゐる。愚作だが

たいふうの刻々迫るを告げてゐるラヂオの声はただに高しも。が出来ただけ。

十月九日 夜付、消印不明、住所は松ヶ崎正田町。

昨日のレオナルドへ・ダ・ヴィンチへのデッサンの複製へ写真は君に渡した分三円に出来るから右御通知します。一枚七〇銭と言つたが六〇銭にて出来る筈です。誰かほしい人があれば実費で何時にてもお分けします。急ぎ右迄

情けないぞえお神威（カムキ）さまはなぜに女の足止めた 江差追分

ひとりゐて思へば何の時雨かな

夜来

へこのころ森田君はレオナルドのデッサンに傾倒していて、フランスかイタリヤで出版されたデッサン集から十枚ばかりコピーを作つた。その一部をわたしも分けてもらった

十月十三日 午後、伏見局消印、手紙。

土曜日は愉快だつた。

日曜の晩へ大塚五郎へ先生の処へ行けなかつたのは残念だつたが 色々都合もあることだらうし 仕方がないとあきらめる。

ついでには十八日には「水麩」への送稿にはおそいから 何日か君がへ大塚先生宅にへ行つて 同封のものをへ短歌へ見てもらつてもらへないか。それでは何日もいつもずぼらばかりしてゐる様だが、そのことをよく話しておいて下さい。

何なら 今月は添削へ歌稿提出の方はやめておいてもいい。君はどー思ふ。へんまつ。

實際あの選者にはいや気がさしてゐる。全然僕等と考へや立場が反対だし、第一あの選がむちやくちやだ。

昨夜は不眠に悩まされてねむつたのがけさの六時だつた。九時頃目があいたが、それ以後気分がすぐれぬ。

今日はこの位で止める。又何日か尋ねて来てくれ。唐津茶碗は当所へ持つて歸つた。あの硯で字を習つてゐるか。

この手紙出すのは明朝となる。火曜日午後3時 青曠 枯魚先生

十月 十六日 午後、伏見局消印、はがき。

今日はあれへ前便に同封してあつた歌稿に大塚先生の批評を書きこんだものであるうへを送つてもらつてありがたう。十八日は多分だめだ。色々迷つたり考へたり為ることが多くていけない。昨夜はおでんやで二時間程ぐでぐでに酔つてしまつた。やたて承知。あまり高くないだらう。

遊びに来てくれてもいい。期日時間を知らしてくれたり都合を書く。

十月 二十一日 午後、伏見局消印、はがき。

矢立は、では来月君に譲らう、是非入用か否かを知らしてほしい、君の方に譲るのなら僕もかはりを探さねばならぬから。あの矢立は鉄砲矢立と言つて割合珍らしい型で、ちよつと見れないものだ、

曠平

十月二十八日 午後、伏見局消印、はがき。

矢立代価壱円也

僕が現在持つてゐるから君のほしい時には言つて来たまへ 何時でも譲る、但し僕も絵を描かねばならぬ故必要だから前もつて知らしてくれ さうしたら又別のを買ふから、これはなかなかい、矢立だ、

十一月 『水鑿』十一月号掲載詠草。送稿は三カ月前、すなわち八月二十日までだったはず。

こほろぎの鳴きしく夜は西空に懸る二日の月あをむなり

まる寝して勾欄ごしに見る山は狭霧流れて夕づきにけり

白々と野のいや涯になだりつつ尽くるとは見えずこの萱原は

空の下にとゆれかくゆれさやぎつつ尾花の末は並(なべ)てそろへり

まなかひに白く続ける薄生のその穂の果に暮るる山々

ひそやかに秋草の秀はゆれにけり月のしたびの照り蒼き原

濃青なる野原にありて目に痛し雁来紅の紅のいろ

秋たてば秋海蘂の花の色朝の庭にさえわたるなり

唐黍の枯葉をならし吹きわたる野分の末に立つけぶりかも

十一月十三日 午後、伏見局消印、はがき。

今朝ハガキ見た

十五日はい、と思ふ 但し僕の方ですこし用があるから後れるかも知れぬ、君はさきに大塚先生の所へ行つてくれ給へ、(六時半迄待つてくれ) 後れたら僕は直接先生宅へ行く、

十一月十三日 午後、伏見局消印、はがき。

十五日の朝旅行せねばならぬこと、なつた 十四日の晩は如何だらう、とに角十四日の夕 君の方へ行くからよろしくたのむ、或はこの手紙より僕の方が早く行くかも分らぬが、

十一月十日 ? 日 午前、上野局消印、はがき。 「伊賀愛染院のほとりにて 曠平より」

簞のかたへにありて芭蕉のや伊賀の上野のおくつきどころ

伊賀は親しい国だ 古窯をみる あきたら漁陶する

谷あひの川水清みた、なはりしづく巖はすみわたるなり (笠置の溪谷)

十一月十九日 午後、四日市局消印、はがき。

伊賀の旅を終へて四日市に來た。山々の紅葉と青い松は美しい、二十一日頃 帰る予定してゐる

た、なはる山の向うにのみたてる三国ヶ岳にたちむかひけり

峡深く汽車の太笛長鳴りてこだまは低くこもらひにけり

十一月二十日 龜山大阪間へ駅局消印、はがき。

暮近き龜山町におりたちて鈴鹿峠に向ひけるかも

これから鈴鹿越えをやる。関・坂の下・土山等有名な所を通る予定　　龜山駅にて　曠平

十一月二十一日　午後、滋賀・土山局消印、はがき。「土山にて　曠平」

へうへうと風に吹かれて登りけり鈴鹿の山を行きなづみつつ
のぼり来てしかも曇れり並木路に風ただ高き鈴鹿山かも。

鈴鹿二里の峠を徒歩で越えて今土山町にゐる。坂の下から曇つてゐたが今ようやく晴間が見える。旧道は昔
の東海道　絶景多し、

十一月二十六日　午前、聖護院局、はがき。松ヶ崎正田町。

伏見の方へハガキもらつてありがたう　しばらく京都の方にゐるから手紙はこちらへくれ給へ　今日応挙展と文
展をみた、応挙は実に素晴しかつたが文展は失望した、又遊びに行くかも分らぬ、当方は不在勝ちだから来てく
れぬ方がい、

十二月　『水鏡』十二月号詠草。

月をよみ露台にをれば秋の夜は肌を寒くしはぶきにけり

しらじらと残る月かも暁のだんだん畑に人のゐる見ゆ

野の末に乱るるけぶりへうへうと野分は著く吹きわたるなり

忽ちの時雨は止みておぼほしき葦野の更けに月出でんとす

さむざむと秋の浅夜の道ゆけばおぼめきて咲く萩のひとむら

馬の背に秋の曇りの日はうすし萱生を分けて行けるその馬

水底にしづける石のしらじらと夕べは寒き音をたてる川

秋草に露霜深きあかときの道ゆく牛は静かなりけり

いきどほりて酒のむ時の多くなりへぬ夕べとなれば街に出でゆく

へ右に挿入した「ぬ」は、わたしが鉛筆で掲載誌に書き入れておいたもの。多分、原稿にはあつて選者が削つたのを、森田君の意向にそつて書き入れたのであろう。なお、同じ号の、わたしの詠草九首のうち五首は森田君をうたっているので引いておく

一日曠平と陶器の話に余念なし

曠平が茶碗の話何時迄も尽きずひたすら聞きてわれも楽しき

さかづきを机一杯にひろげつつ眼尻さげてよろこぶ曠平

曠平よ汝が面肌は古唐津のさかづきの肌目に似るぞかなしき

起きて見つねて見つ飽かで頬ずりし唇つけにけり久太の急須に

曠平が鼻高だかのこの急須見ればつくづく心清しも

十二月一日 夜付、封筒は二日付、二日午前、聖護院局消印、墨書手紙、「直披」。

先日一度便りを出してをへママゝいたがその後如何

小生今やそれこそ一生に一度といふ様な気持で悩んでゐる、

それは外でもないが去る二十七日 大学で診てもらつた結果終に恐れてゐた脊椎カリエスの診断を受けた 相当深刻だらう

死ぬといふことは考へられぬがそれでも悪性の病氣故だらうなるへママゝか分らぬ、治癒するとしても今後何年かをギブスベッドで外部と全く交渉を断られた生活を為ねばならない、暗い気持で毎日送つてゐる、

好きな陶器はひねれぬし 絵筆が持てぬ 絵筆が持てぬといふことは僕にとつては致命的な打撃だ

君にも一度会ひたいと思ふが 今は会ひたくない、今来てくれても 僕は会ふ気がしない 会つてもい、様な気持になつたら手紙を出すから是非来てくれ給へ、

今後の自分を慰めるものは 読書と短歌と食ひものだ、

へ正岡ゝ子規が悩んだのもカリエスだ（今小生を子規にくらべるのはいさ、か気がひけるが）子規がこんな難病であれ程の大業を完成したのだから その何万物へ分の一位は出来ない事もなからうと思つてゐる、しかし癒らない事はないと思つてゐる 養生さへすれば治る病氣ださうだ しかし長い日数を要する

今月の君の詠草はよい 鼻血たらたらと流るが一番い、と思つた

文展の招待券同封する 十二月一日夜 曠平 枯魚大人机下

背の痛みやや覚えつつ病院の長き廊下を通りて整型外科病院に入る、

棟

湖のへに風来たり波やはるばる／秋暮れて／くれなゐ稀に香り少し／水の光 山の色 人と親しく／えも言へね／かぎりなく好し

蓮の実はずでにたけ葉や老いぬ／露しとど／浮きくさの花みきはの草に／砂に眠るかもめは頭めぐらさず／恨むかに似る／人去ることの早きをぞ

この詞、本によつては「蓮の花を見にいつて」（賞荷）という題になっている。内容による題だが、適切とはいえぬ。詞調を分類説明する書として最も総合的な『詞譜』では、卷二「憶王孫」の項に分類する。「憶王孫」は単調のものが多く、これはその別体だという。独断ながら、わたしは、温庭筠の「河伝」に触発され李清照が創作した新調だろうと推察する。温氏の「河伝」は次の通り。

湖を／ながむれば／雨さやさや／煙る浦べの花の橋はるけしや／謝嬢の眉に愁ひ消えず／ひねもす／魂迷ふ夜の潮に

旅の人は天のはて遠く棹さし／春暮れて／鶯の音の腸をたつ／若耶の溪の／溪の西／柳のつつみに／聞こえず君の馬のいななき

原文は省略する。「王孫」は貴公子とか若殿さま、というほどの意だが、花柳のちまたではしばしば客をこら

呼んだ。温氏の詞はそのちまたで男と女の交す口調がまざまざと感じられる。清照の新調は、本歌とはすつかり別の調子の清らかなものとなっている。どちらがよいとかわるいとかいうのではない。

さてこの「怨王孫」、双調、五十四字、前後段各々三カ処に仄韻をふむ。『詞譜』では無名氏の作とし、文字も少し異なる。だが清照の作であること、今日では定論となっている。まず前段。

湖上風来波浩渺。

湖の上に風がやってくる。すると波が寄せ、波が返し、その波の幾百幾千幾万のかさなる向うは一色の水平線。そうしたひろびろとした、しかしその広い空間に幾百幾千幾万の感情の寄せては返すさまを視覚に表出する語として、「浩渺」という語がこのように効果的に使用されたのは、おそらくここが初めてだ。

秋已暮、紅稀香少。

秋の日はもう暮れてくる。「已」の字に愛惜がにじんでいる。ながめつくした紅がかすかとなり、酔ったその香も風に散って少くなった。その色と香りが蓮のものであることはいうまでもないが、ここではその紅と香とのみをいって蓮といわぬところがいい。しかもその紅と香とが「稀」と「少」の限定をうけることによって、ピアニッシモの効果が發揮される。

水光山色与人親、說不尽、無窮好。

水の光、山の色、それらが何と人と親しいことであろう……、思わずそんなことばを口にする。だが到底、ことばなんぞで言いつくせるものではない。きわまることのないこの好さは。

ピアニッシモのあとに、メゾフォルテでうち出された「水の光 山の色 人と親しく……」という句ののびやかさ。おおらかなその句が、「えもいへね」でいったん引きとめられ、「かぎりなく好し」と放たれたとき、初句の「はるばる」が無限の感動に高められる。

「無窮好」といえば、晩唐の詩人李商隱の「楽遊原」の結句「落日無限好」が反射的に思い浮かぶ。清照はもちろんそんなことは百も承知で、好きで好きでたまらぬその句を使ったのだ。そのあけつびろげな愛情が、彼女の句を模倣のいやしさにおとさず、別種の新しい趣きをそえている。次は後段。

蓮子已成荷葉老。

前段が「王孫」すなわち男の目を通した風景とすれば、後段はその愛人すなわち女の目を通した風景であろう。蓮の美はすっかりふくらみ熟して黒くなった。そうしてその葉は老いた。女は男の愛を受ければ子をはらみ、はらんだ子が生れ出るころには女としての美しさは衰える。それこそ女のまことの成熟であり、めでたいことであるはずだけれど、父親として成熟するより、まだ若い男として美しさに目移りしがちな「王孫」と対えば、女には「くれなる稀に香り少し」ということばにも己へのあざけりを感じられ、身の老いに心が傷むことであろう。

青露洗、蘋花汀草。

眼のさめるような深い青の露をしとどにうけて、目立たなかつた浮き草の花やみぎわの草がさえさえとはれだつ。これも蓮の老いたればこそである。前段ではピアニッシモで弾かれたところが、後段ではフォルテにかわっている。「青」を「清」とする本があるが、ここは青でなくてはなるまい。

眠沙鷗驚不回頭、似也恨、人歸早。

沙洲に眠るかもめはふりむこうともせぬ。眠っているのなら、ふりむかないのはあたりまえ。だが、ほんとは眠ってなんかいなくって、恨めしさに眠ったふりをしているみたい。あなたがさつさと帰ってゆこうとなさるの。おのれの恨めしさをかもめにかこつける女のことばであること、いうまでもない。「怨王孫」と題する所以がびたりと歌いすえられている。前後段とも、句点（。）で切ったところが韻字である。

この詞は、とりあげて批評したものがあまりないようだが、すぐれた作品だと思う。このような作品が、なぜ批評家にとりあげられなかったか、を考えると、中国の批評家たちのある傾向を推測することができる。

この作には、エピソードやアネクドットがくつついていない。やじ馬的興味から遮断されている。道徳的判断の対象としにくい。

政治的譬喩ともしにくい。

製作時が判定しにくいため作者の伝記製作に役立たない。

天衣無縫の感じがして文句のつけどころがない。

ほかにもあるうが、ざっとまあこんなところから人はこの作をとりあげずにすませてしまおうのであろう。批評家のとりあげないこれらの点こそがこの詞の長所。とわたしは思う。中国の人たちでも批評家でない詞の愛好者は、黙ってこの詞を舌頭にまろばせてきたに違いない。わたしたちは批評家に義理だてするために詩を読んでいるのではない。いい詩に出会えば、せめてしばらくうるさい世間の道理を離れてうっとりすればよい。(8・24)

は が き 連 句 ・ 紫 陽 花

水六 原田昌雄
櫟 齋 原田憲雄

先日はご過訪ありがとうございました。お借りした連句の本をぼつぼつ読んでゐます。昔の日記を見ましたら駄句が並び、中に、

紫陽花や沓脱くらき小玄関

とありました。季だけは今のもののやうです。発句になりませうか。一九八三年五月四日未明 櫟齋
おはがき有難うございました。発句拝誦。雨上りとも見えて、紫陽花のあたりには不思議な明るさが漂つてをります。これを連句の首に据ゑると致しますと、多少謙遜の辞とお見受け致すべく、

奥の渡りをふいの初蟬

と付けさせて頂きました。ご多用とは存じますが満尾までお付合ひ願ひたく。 八日 水六

高吟を付けて頂き恐縮です。導かれながら勉強いたしませうか。

荷も軽く鄙の湖船出して

送り工合如何。拙句、歌仙にふさはぬやうなら考へ直しますから忌憚なくご批判を。 九日 櫟

追ひすがる鳥とてなかりけり

貴句、広々とした景中へ引出して頂き、気も軽くなります。「船出して」で「渡り」の読みかへとなりますから、「鄙の湖」と「奥の渡り」との重なりが、第三だけに少しうるさいのではないでせうか。送りは、初折△。

B・A・B、名残 B・A・B・A で結構です。

尊評まことにもつともですから第三を訂正して、

荷も軽くこの湖に船出して 櫟

追ひすがる鳥とてなかりけり 六

月待てばひとりの宴おもしろき 櫟

さて、如何でせうか。進めかたは、すべて勉強ですから、おつしやる通りに致しませう。

十一日 櫟

先程は路上にて失礼。「この湖に」の方を頂き、

舌にころがす歌と芋がら

「追ふ」と「待つ」の縁でせうか。「おもしろき」の語にて、この面が救はれた感がございます。拙句、余り

十三日 六

上品なものでなく気が引けます。お次は初折のウラ。

純白の自動車から降り立つ青年紳士に声をかけられ、走らせてゐた自転車をあわてて止める老僧：：そのまま
犬筑波にはめこまれさうな光景と苦笑しました。よい頃合にくだけた句を頂き興味津津々。ただし後を追つかける
のがなかなか難儀です。

銅駝坊しぐれに濡れてゆくや誰

頼山陽に粹の手ほどきをした中島棕隠先生、狂詩作者としては銅駝余霞楼と号した由。拙句の方はヨカローと
は義理にも申しかねますが。

十四日 櫟

このあたりで恋句を出すところ。あたかも読みやうに依つては、艶に、しつとりした句。粹すぢのことは不案内でございませうので、左の如きもので御茶を濁します。

右の手借りて鏡合はせる

貴句を妓女か誰かが二階あたりから見下してゐるところと見、妓女の句を付けました。「舌」「手」の打越が気になります。式目では何とも云つてゐないやうですが。「しぐれ」は冬季らしいデス。「銅駝」の語は李賀にも出てきたやうに思ひますが。

十六日夜 六

当て推量でおいた「しぐれ」、ご教示で歳時記をくつたらやはり冬でした。たびたびの変更ではづかしいのですが、

銅駝坊あきさめに濡れ行くや誰

櫟

右の手借りて鏡合はせる

六

髪ながく闇かぐはしき幻に

櫟

李賀とおつしやつたので「美人梳頭歌」の句から翻案しました。ただし、季にはかかはらぬ雑のつもりです。句に具体性が乏しくハツラツとしないのですが、追々に調節いたしたく。「闇」とさきの「月待つ」は去り嫌ひに当りませうか。

十八日 櫟

前回の拙作、「手」はやはり引つこめたはうがいいやうです。もつとも、貴吟への移りのこともあり、ご同意が得られますかどうか。

ちやんと持つてと鏡合はさす

六

髪長く闇かぐはしき幻に

櫟

荒れし野づらの打ちたふる墓

六

「闇」は夜分三句去（蕉門では二句去とか）ですので差支へ無しと存じます。「幻に」で気品のある恋となりましたが、拙句、これを真の幻にしてしまひました。

十九日

六

「右手」の尊句面白いと思ひますが、拙句の訂正に合はせて下さつた「ちやんと持つて」を拝受し、開発の波はここにも及び来て

鬼趣ゆたかな秀句を無惨に打ちくだくやうで恐縮ですが、夢さめて見出す現代の味気なさを、どんな風に貴兄の詩で救つて頂けるかを樂しみ：

二十日

櫟

ダイヤ嵌めたき指の節くれ

貴吟、趣向の妙ともいふべき見事を付けと転じ。それに引きかへ、拙吟、手を引つこめても指を出すといふ不味い芸のあらはとなりました。処で「渡り」と「鳥」とが氣になつてゐます。人様のことは申せません。改めるべきかと存じますが。

二十三日夜

六

ルパン三世の車に月やさえさえと

尊句のダイヤは男のもの、ここはぜひ女人をと思つたのですが、さうすると恋めくやうで、仕方なくマンガにしました。如何。脇の「渡り」と第四の「鳥」、全く気づかず、伺つてもわたしとしては氣にならず、秀句と思

ひますが、先達のご意見、お考へあらば従ひます。

二十五日

畏を狐のするりぬけ出る

「ルパン三世」とは恐れ入ります。わたしもテレビで感心しながら見たことがあります。面白い転回、このあたり正念場かと、様々に考へましたが、結局は右の拙句。いささか付きすぎが難でせうか。二十六日 六

いづくよりかやさしき母の声きこえ

尊句に付けるのは中々するりとはゆきませんでした。苦しい夜の果てにふと。今朝の雨が明日は晴れるといいなと思つてゐます。

二十八日

櫟

むむこれはうまい、と人さまの句に感じ入つてゐるばかり、といふ訣にはゆかないのが連句のつらいところであり、良いところでもあるのでせうね。今回、拙句から貴吟へのうつりには最も詩情を感じます。母で付けて、捨といふ名をむしろ好めり

近ごろ家で見つけた明治初年の小学生用教本にこの名が書いてあつたものですから。

三十日

六

明治初年 花の巴里に留学し

お葉書の「明治初年」に、田辺蓮舟を思ひ出し、蓮舟に「支那文学」を習つた島崎藤村を思ひ出し、その小説の主人公に「捨吉」がゐたやうな気がし、右の句ができました。蓮舟は『幕末外交談』の著者で、その漢詩二首小生の『日本漢詩選』に入れてあります。

六月一日

櫟

(次号につづく)